

五月の天気雑話

大後美保

八十八夜

五月の声を聞くようになると、子どもの頃によく歌った「夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂る、……」という歌と同時にその頃のことを懐しく思い出される。寒さから開放されて思うぞんぶん遊ぶことができるようになるのが何よりも嬉しかった。

八十八夜は、徳川時代に幕府の天文方の安井春海が、京都を中心とした日本の土地にあった最初の暦である貞享暦を作ったさいに二百十日などともに雑節の中に取り入れたのである。八十八夜を取り入れたのは宇治の茶園で霜除けをとる時期がだいたい八十八夜のころであり、多くの農家でもこのころが霜とのお別れで、あまり霜害を受けなくなるからであ

る。八十八夜が暦に取入れられてからは、八十八夜の別れ霜、あるいは忘れ霜などといわれ、農家ではこの日を種まきや植付の時期の目安として利用するようになった。これについて八十八夜はこの日を過ぎれば霜害を受ける目安としてはなく、丁度その頃に大霜害を受けやすいから注意を喚起するためにいわれたのだという説もある。これはたまたま五月の初めに霜害がよく起り、この頃に霜害を受けると被害が大きかったのでこうしたことがいわれたのである。

霜害を恐れ八十八夜待

虚子

八十八夜は立春から数えて八十八日目当たる五月二、三日で、八十八という日を選んだのは特にこの日に霜が降りるからではなく、語呂がよく覚えやすいからで、夜としたのは夜に霜が降りるからであろう。語呂がよいために歌にもなり、多くの人に親しまれた。

実状はどうかというと、現在の京都の平年の終霜日は四月十九日であるから八十八夜よりかなり早く霜が見られなくなり、現在ちょうど八十八夜頃になると霜が降りなくなる地方は、中部山岳地方や東北地方と北海道南部の平地地方である。徳川時代に関東以西の地方で八十八夜が忘れ霜の時期として適用したのは、この時代は小氷期で、現在よりもかなり寒かったからで、その寒さは、冬に関西の各河川が凍結したり、和歌山県下辺まで北海に棲むトドが南下していたことなどからもうかがうことができる。

明治から昭和にかけて終霜日がどのくらい早くなったかを、明治十九年から昭和十五年までの五十四年間の平年終霜日と昭和十五年から昭和四十五年までの三十年間の平年終霜日と比較してみると、後者のほうが福岡では十三日、京都では十二日、東京では八日、仙台では六日、それぞれ平年終霜日がおくれ、気候が温暖化していることがうかがえる。

ただこれをそのまま気候の温暖化といえない点もある。それは、近年、都市が発達し、都市内でのエネルギーの消費量が増加したために都市には都市特有な気候が形成されるようになってきた。多くの気象台の所在地も都市化の波にのみこまれ、周囲に家が建ちこみ、こうした環境のちがいが終霜日

にも大きく影響するようになってきた。これは郊外にくらべて都市内の結霜日が以前よりも早くなったことからもうかがうことができる。

五月晴れ

五月に入るとまもなく立夏で、日ごとに日射が強くなるのを覚え、気温のあがりかたは北の地方ほど速い。日最低気温についてみると、十日間に鹿児島では〇・九℃高くなるのに対し、札幌では一・四℃も高くなる。

暖気の北上にもなっているいろいろな花の花前線が北上し、しだいに新緑が深くなり、「目に青葉、山ほととぎす初鰯」という季節となる。

五月の気温は、秋の九月半ばから十月半ばころの気温と同じで、寒くも暑くもないよい季節という点ではちがいがなが、五月は気温が上り坂にあるために、秋とはちがった活気や喜びを感じる。

五月のうちでも五月晴れの日はとくに心地よい。古い書物を見ると「五月は悪月」としているものが多い。これは昔は陰暦が使われ、陰暦の五月は太陽暦の六月に当り、六月は梅

雨期で天気の良い日が多いからで、昔の五月晴れは梅雨期の合間の晴れ間のことであつたのである。それがいつのまにか、太陽暦の五月の天気の良い日を五月晴れというようになつた。かつてはこれはまちがいであるからと反対する人もあり、しいていうなら「五月晴れ」といえばよいと主張する人もあつたが、ごがつというよりさつきというほうが語感がよいために、今では五月の晴天を五月晴れというのが気象のほうでは公認されている。したがつて梅雨の晴れ間は五月晴れといわないで梅雨晴れという。

五月晴れというといかにも五月に晴天が多いように思われるが実際はそうでない。多くの地方は四月の降水日数と同じか、五月のほうがかえつて一、二日多い。ただ雨の降りかたが四月の頃とちがつてくる。五月は前半に晴天が多く、後半に雨天が多く、したがつて晴天がまとまって見られるので、とくに五月晴れとよばれるほどの晴天が見られることとなる。五月に入ると大陸の高気圧の勢力が弱くなるにしたがつて、その一部がちぎれて日本のほうへ移動性高気圧となつてしばしば流れてくる。しかもこの移動性高気圧は早春のものより大きく、時には次ぎ次ぎと並んで移動してきて、帯状高気圧になつてしまうことが多い。こうしたことから晴天が

続くこととなる。また日本を通り抜けた移動性高気圧が東太平洋上に居すわつて、日本付近が南高北低の夏型の気圧配置のようになる、この場合にも晴天が続くこととなる。

また五月前半には、移動性高気圧の中心が日本を通り南方海上に出た後で、この高気圧のために、日本の南岸沿いに前線ができて、この前線沿いに低気圧が移動してきて、雨を降らせることもあるが、この場合の雨は長続きしない。こうしたわけで、五月の前半には五月晴れが見られやすい。

走り梅雨

梅雨の入りは暦の上では六月十一、二日だが、この日より十日も二十日も、前の頃から天気がぐずつてあたかも梅雨に入ったように思われる天気となることがある。これを走り梅雨、梅雨の走り、梅雨の前ぶれ、迎え梅雨などという。現象は同じだがニュアンスは多少ちがう。走り梅雨、梅雨の走りにくらべると、梅雨の前ぶれ、迎え梅雨は入梅に一層近づいてからの雨とみたほうがよさそうで、五月末から六月の上旬にかけての雨である。

また走り梅雨のことを卯の花腐しもいう。ウノハナとは

ウツギのことで、ウツギの花は多くの地方ではだいたい卯月（陰曆の四月）に咲き始めるので卯の花を腐らす雨という意味と、また移動性高気圧が太平洋に抜けた後で吹く湿気を含んだ東風を「くだし」というので、この意味も含ませてこのようによんだのである。今ではあまり使わないが、いかにも日本らしい発想による名称の付けかたで、五月晴れのように残したい季語である。

ウツギは高さ一―二メートルになる落葉低木で、白い花が咲き、田畑の境界などによく植えられていた。天候の影響を受けやすい農家ではウツギの花の咲きかたを見て梅雨の降りかたを知る手掛りともしていたようである。

そのためか、ウツギの花の咲きかたから夏の天候を予想することわざとして「卯の花が枝の先に多く咲けば日照り」「卯の花が根元に多く咲けば風雨多し」「ウツギの花に白花多きは雨多き兆」などと各地でいわれている。

ウツギも改良されて、ヤエウツギ、サラサウツギなど美しい花が群がり咲くものがあり、これは都会でもかなり見受けられることができる。私の家にも二、三種のウツギがあり、この花が咲くころからいろいろな花が咲きだし、一年のうちで庭の眺めの最も美しい季節となる。

走り梅雨があるかないかは都会の人にとってはそれほど問題でないかもしれないが、農家にとってはきわめて重大事である。走り梅雨が盛んに降ると、病虫害が多発して、大減収となることもある。この著しい例は昭和三十八年である。この年は梅雨の走りがいちじるしく顕著で、連日のように雨が降った。

毎日のように雨が降ったから、農薬を散布しても効果がなく、麦類には赤かび病などが大発生して、明治以来の大減収となった。四麦総収穫高は前年度の僅か二五・七パーセントで、高知県では前年度の七・五％という大凶作となった。

梅雨の走りが顕著なものも困るが、梅雨の走りの全く見られない時にも灌漑用水が不足したりしてひどい時には干害を受けることとなる。梅雨の走りは、その年の本格的な梅雨を占なう示標ともなる。

本土では五月の雨を梅雨の走りとみることができると、琉球や南西諸島では、梅雨の走りも入りも早く、五月のうちに雨期に入ることもあり、これを夏ぐれとよんでいる。

（成蹊大学）